

Title	「のだ」の表す命題間の関係と課題設定
Author(s)	高梨, 克也
Citation	Dynamis : ことばと文化 (1997), 1: 42-58
Issue Date	1997-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/87628
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

「のだ」の表す命題間の関係と課題設定

高梨 克也

本稿の目的は、日本語における文末表現「のだ」について、これが表す命題間の関係という観点から考察し、「のだ」を使用するための文脈上の条件を明らかにすることである。

日本語の文末表現「のだ」は命題間の統合的 (syntagmatic) 関係を表すものであると考えられている¹。つまり、「Qのだ」という文が用いられた場合、このQは主題となる命題Pと何らかの関係を持っているということである²。ただし、Pは先行文脈において言語的に明示されていることも会話を取り巻く状況から明らかである場合もあり、さらにこれらのいずれからも特定しがたい場合もある。ここではPとQの関係のうちの次の4つについて考察する³。なお、以下では混同の起こらぬように「のだ」の付く文をQ、これに先行 (まれに後続) しこれと関係のある文をPと表記することにする。

関係1 : QがPで表現された出来事の原因や理由である場合

関係2 : Qがある判断Pの根拠となっている場合

関係3 : Qがある発話Pを行うことの原因となっている場合

関係4 : QがPを言い換えたり、別の角度から述べたり、要約したりしている場合

1. 出来事の原因と判断の根拠

(1) a : 熱がある。風邪をひいた {のだ/からだ}。

b : 風邪をひいた。熱がある {のだ/*からだ}。

(田中 (1979)、益岡 (1991))

¹益岡 (1991)p.139

²主題Pとの関連という視点は山口 (1975) によって明確に述べられている。

³これらの分類は田野村 (1990) の第3章を参照したものである。

aでは「熱がある」(P)ことの原因が「風邪をひいた」(Q)ことであると述べられているため、<関係1>の「QがPの出来事の原因や理由を表している」例であることになる。一方、bは「風邪をひいた」(P)という判断の根拠が「熱がある」(Q)という事実にあるということを述べるものであり、<関係2>の例である。しばしば「のだ」文は原因と帰結のいずれをも表し得るかのように論じられていることがあるが、こうした考え方はやや誤解を招きやすいものである。上の例から分かるように、aの場合のようにQがPで表現されている出来事自体の原因を述べるものである場合には「のだ」を「からだ」に変えることができるのに対して、bのようにQに述べられている内容がPで述べられている出来事自体の原因ではなく、話者がPのような判断を下したことの根拠である場合には「のだ」を「からだ」に変えることはできない⁴。

さらに、<関係1>と<関係2>を区別するために、「PのはQだからだ」というパラフレーズを用いてみると、Qと関係付けられている命題の性質がより明らかになる。

(1) a' : 熱があるのは、風邪をひいたからだ。

b' : 「風邪をひいた」と私が判断するのは、熱があるからだ。

Qが判断に対する根拠を表している<関係2>の場合にはパラフレーズの際に下線部のような補足が必要になる。なお、この補足部分が「遂行節」の形式になっているという点については第3節で改めて論じる。

ただし、次の例から明らかのように、二つの命題によって言明された出来事の間因果関係が成立している場合にはどちらの命題にも必ず「のだ」をつけることができるとはいえない。

(2) a : 風邪をひいた。雨に濡れた {のだ/からだ}。

(田中(1979)、益岡(1991))

b : 雨に濡れた。風邪をひいた {*のだ。/*からだ。/。}

⁴ 「からだ」に変換できるかどうかという観点から、「からです」は「先に述べられたことに対する理由・原因」を表すのに対して、「のです」は「説明」を表し、「説明」は「必ずしも原因であるわけではない」という久野(1973)の主張に基づくものである

a は、「からだ」による言い換えが可能であることから明らかのように、Pで言明されている「風邪をひいた」という出来事の原因がQ「雨に濡れた」で述べられている例である。しかし、この二つの文の順序を入れ替えたbの場合には、帰結節には「からだ」だけでなく「のだ」もつけることができない。ただし、「のだ」も「からだ」も付かない場合は可能であり、二文の間には時間的な継起関係が読み取れるようになる。このことは次の(3)についても同様に当てはまる。

(3) a : 先生に怒られた。遅刻した {のだ/からだ}。

b : 遅刻した。先生に怒られた {*のだ。/*からだ。/。}

では、(1)の場合と(2)や(3)の場合の因果関係には何らかの相違があるだろうか。確かに(2)や(3)の場合には二つの出来事間に明確な時間的前後関係があるのに対して、(1)の場合における「風邪をひいている」ことと「熱がある」こととの間に明確な時間的順序を考えることは困難であるかもしれない。しかし、この点が(1)と(2)(3)の相違を引き起こしているわけではないことは次の(4)の例から明らかになる。

(4)⁵ a : 部屋のカーテンがしまったままである。 {彼はまだ寝ているのだ。
彼が⁶まだ寝ているからだ。}

b : 彼はまだ寝ている。部屋のカーテンがしまったまま {なのだ/*
だからだ}。

⁵この例文は蓮沼(1991)のものを変更したものである。蓮沼自身による元の例文は、aとbに対してそれぞれ「部屋のカーテンがしまったままである。だから彼はまだ寝ているのだろう。」と「彼はまだ寝ている。だから部屋のカーテンはしまったままである。」というものであり、それぞれ<判断と根拠><原因と結果>の関係を表すものであるとされている。なお、蓮沼は「だから」によって接続される二つの命題間の関係として、これらのほかに<発言の理由と発話行為>を挙げており、本稿において論じられている分類と平行する部分が多い。これらの3種類の関係は、Schiffrin(1987)が会話におけるbecauseの用法としてあげているものに基づくと考えられる(メイナード(1993)第10章参照)が、文末表現「のだ」「からだ」「わけだ」とこれらの接続詞をすべて視野に入れての論考は今後の課題とせざるをえない。なお、「のだ」の表す上記の4種類の関係のうちの<関係4>に対応する接続詞は、一般に「だから」ではなく「つまり」であることが多い(山森(1990)参照)。

⁶「のだ」を「からだ」に変えた場合、主題表示の「は」が主格の「が」になると思われるが、このことは、『Qのだ』を説明(=原因・理由)の表現として用いるには、Qであることがまだ聞き手に知られていないことが必要であるのに対して、『からだ』にはそのような制約はないという田野村(1990)の主張と関係している。つまり、あえて言うならば、「のだ」が付く場合には伝達の中心(断定)は「の

a と b を「PなのはQだからだ」の形式にパラフレーズしてみると、

a' : 部屋のカーテンがしまったままであるのは、彼がまだ寝ているからだ。

b' : 「彼はまだ寝ている」と私が判断するのは、部屋のカーテンがしまったままだからだ。

となり、aはPの「部屋のカーテンがしまったままである」ことの原因としてQ「彼はまだ寝ている」が述べられているという<関係1>の例であるのに対して、bはQが「彼はまだ寝ている」という判断の根拠であることを表すものであることが明らかになる。確かに「彼がまだ寝ている」と「部屋のカーテンがしまったままである」の間には明確な時間的順序関係があるわけではないが、この二文の背後にある「彼が起きればカーテンがあく」という大前提においては時間的な前後関係は明確である。従って、(1)や(4)における二文の関係をA、(2)(3)における関係をBとするならば、AとBの相違は二文が言明している出来事間の時間的前後関係の相違ではないことになる。

田中(1979)はこれらの相違を「事実文」「判断文」という観点を用いて考察している。

(1) a : 熱がある。風邪をひいた {のだ/からだ}。

<事実文> <判断文>

b : 風邪をひいた。熱がある {のだ/*からだ}。

<判断文> <事実文>

(2) a : 風邪をひいた。雨に濡れた {のだ/からだ}。

<事実文> <事実文>

田中の説に従えば、Aすなわち(1)や(4)の場合のように、二文のうち的一方が「判断文」である場合には、どちらの命題に「のだ」を付けることも可能であるのに対して、Bすなわち(2)や(3)のように二文が共に「事実文」である場合に「のだ」文におかれているのに対して、「からだ」が付く場合の伝達の中心は因果関係自体にあるということである。従って、「からだ」が付く場合の方が従属節的な性格がより強くなるため「が」が用いられるのだと考えられる。

は、両者の間には明確な因果関係が存在しており、原因節にしか「のだ」は付けられない、といえそうである。しかし、これだけではそもそものような文が「事実文」や「判断文」であるのかがまだ不明確であるため、こうしたAとBの相違の根拠についてははっきりしない。特に、(1 b)と(2 a)における「風邪をひいた」が前者は「判断文」であり後者は「事実文」であるという主張を何の説明もなしに受け入れることはできないであろう。そこで、この点について、次の例文を用いて考えてみよう。

(5) a : 水温が0度以下になった。薄氷がはりはじめた。

<事実文>

b : 水温が0度以下になった。薄氷がはりはじめたのだ。

<判断文>

(田中(1979))

aとbの用いられる状況を想像してみるならば、aの場合には発話者は「水温が0度以下になった」ことを「薄氷がはりはじめた」ことを観察する以外の方法(例えば、温度計を用いるなど)によって確認しているのに対して、bの話者は「水温が0度以下になった」ことを「薄氷がはりはじめた」という事実の観察に基づいて判断しているのではないかと考えられる。つまり、aの話者にとって「水温が0度以下になった」ことはすでに事実であると考えられているのに対して、bの話者にとって「水温が0度以下になった」ということは「薄氷がはりはじめた」という観察可能な事実からまさのこの瞬間において新たに引き出された判断なのである。従って、同一の表現が文脈に応じて「事実文」とも「判断文」とも見なされ得るという主張は決して無理なものではない。また、当該の発話状況において文末に「…のだらう」を付けることができるものは「判断文」、これを付けられないものは「事実文」と判定することも可能であると思われる。

以上の考察から(2 b)「雨に濡れた。風邪をひいたのだ。」では何がおかしいのが明らかになった。Aの場合、少なくとも発話の時点においては、発話者にとって出来事の因果関係における原因P((1)の場合は「風邪をひいた」こと)が事実であることは直接確認し得ないことである。従って、Pであるかどうかは直接観察

可能な結果Q（「熱がある」こと）に基づいて間接的に推論せざるを得ない。このように、結果Qという直接的証拠に基づいて原因Pを間接的に判断したということを明示したのが「Pであると判断するのはQだからだ」という形式で判断の根拠を述べる言明なのである。これに対して、(2)を含むBの場合、因果関係における結果Q（「風邪をひいたこと」）が確定した事実であると見なされているという点についてはAの場合と同様だが、この場合はAとは異なり原因P（「雨に濡れた」こと）も事実であることが確定している。従って、原因Pを探るためにわざわざこれを結果Qから間接的に推論しなければならない必要性はまったくない。よって、『「雨に濡れた』と私が判断するのは、風邪をひいたからだ』という判断の根拠を示す形の言明は不適當であることになるのである。言い換えれば、因果関係における原因Pが直接確認できる事実である場合には判断の根拠を表す言明は存在し得ないということである。

2. 「課題」の設定

これまでは二文P Qの連鎖において後続文Qに「のだ」が付いている例を中心に考察してきた。これは「のだ」の付く文の考察の際にはこれと関連付けられる文を考慮に入れることが重要であるという先行研究の知見に従い、最小限の文脈を提示するためであった。つまり、「Qのだ」の考察のためにPを必要としていたのである。しかし、特に会話においては二文の順序関係は重要な考察対象である。従って、今度は、「Pがすでに発話されているとき、なぜPの直後に『Qのだ』が述べられる必要があるのか」という観点から考察してみる必要がある。例えば、(2 a)において、先行する「風邪をひいた」の後になぜ「雨に濡れたのだ」と発話される必要があるのかということを考えてみなければならないということである。おそらく、話者は（潜在的な）聞き手がPを聞いた際に抱くであろう疑問に先回りしてQで答えているのではないだろうか。ここで聞き手がPを受けて示すであろう疑問は「話し手はなぜ風邪をひいたのか」というものであろう。益岡(1991)はPが引き起こすこうした疑問を「課題の設定」という観点から論じている。つまり、「のだ」文は「設定された課題に対する解答を与えること」をその機能としているということである。この観点をを用いれば、例えば、(5 b)の「薄氷がはりはじめたのだ」は「水温が0度以

下になった」という先行発話が聞き手に対して引き起こすであろう「話し手は何を根拠にしてこの判断を行なっているのか」という「課題」に対する解答であると考えることができる。

この「課題の設定」という観点を田中の主張する「事実文」と「判断文」の区別という観点と比較してみよう。確かに「事実文」と「判断文」の区別は「P。Qのだ。」を「Q。Pのだ。」と変換できる場合とできない場合の相違を解明している。しかし、この区別は先行文Pと発話者との関わり方の相違を明示したものにすぎないため、なぜPの直後に「Qのだ」という文が述べられる必要があったのかを説明することはできない。これに対して、「課題の設定」という観点からならば「Qのだ」が何のために述べられたのかを説明することが可能となる。しかし、(2 a)において先行発話Pによって設定される「課題」はPで言明されている出来事自体についてのものであるのに対して、(5 b)で設定される「課題」はPという判断を話し手が下した根拠に対してのものである、ということからも明らかなように、ある発話がどのような内容の「課題」を設定するかを特定するまでには至っていない。このことは次の二例を対照することでより明らかになる。

(1) b : 風邪をひいた。熱があるのだ。

(2) a : 風邪をひいた。雨に濡れたのだ。

(1 b)における「風邪をひいた」は「判断文」であり、(2 a)の「風邪をひいた」は「事実文」であると考えられている。すでに述べたようにこのこと自体に異議を唱える必要はない。ここで重要なことは、「事実文」「判断文」の区別は発話者の視点からの区別であるのに対して、「課題の設定」は聞き手の視点から行われるものであるということである。つまり、先行文「風邪をひいた」を発話した段階では話し手は聞き手が自分のこの発話に対してどのような疑問を抱いたかを知ることができず、逆に聞き手も「風邪をひいた」ということの根拠を話し手が持っているかどうかを知ることができないのである。にもかかわらずある特定の状況において(1 b)や(2 a)が発話され理解されているとしたら、話し手が特定の状況において特定の聞き手が抱くであろう「疑問」を察知することを可能にする何らかのメカニズムが存在していると考えざるを得ないであろう。ここではこのメカニズムについて考察することはしないが、いずれにせよ、単に「のだ」文は「課題」に対して解答を与

えるというだけでは、どのような状況で、あるいはどのような発話に対して、どのような内容の「課題」が設定されるのかを予測することは不可能であるため、どのような場合に「のだ」文を発話すべきであるのかを特定することはできないことになる。この点については最後の第5節で改めて論ずる。その前に、PとQの関係のうちのまだ考察していないものについて、この「課題の設定」という観点をを用いながら考察しておこう。

3. 発話内行為遂行の理由

(6) a: 急いでくれ。時間がない{んだ/*からだ}。 (田野村(1990))

b: 私は急いでいる。時間がない{のだ/からだ}。

(6) a': 「急いでくれ」と私が命令したのは、時間がないからだ。

b': 私が急いでいるのは、時間がないからだ。

(6 a)においては、「時間がないんだ」が「急いでくれ」において遂行されている発話内行為「命令」がなぜ遂行されたのかを説明しており、従って、PとQの関係は上記の<関係3>(Qがある発話Pを行うことの原因となっている場合)に分類されるものである。PとQの関係が単純な因果関係ではないことは「のだ」を「からだ」に変換できないことや「PのはQだからだ」にパラフレーズした(6 a')において遂行節を明示する必要があることから明らかである。なお、先行文「急いでくれ」によって設定される「課題」は「話し手はなぜこの発話内行為(命令)をしたのか」というものであろう。

では、発話内行為とその遂行の理由という関係(PとQの<関係3>)は、すでに論じてきた出来事の因果関係(<関係1>)や判断とその根拠の関係(<関係2>)とはどのような関係にあるのであろうか。確かに、「PのはQだからだ」にパラフレーズした結果を見るならば、<関係2>と<関係3>はともに遂行節を追加する必要があるという点で共通しているように見える。しかし、先行の命令文を記述文に改めた(6 b)については、これをパラフレーズした(6 b')がそのまま因果関係を表

していることから明らかなように、例えば(1 b)のPQ間の因果関係とこの(6 a)の因果関係は順序が逆になっている。

(1) b : 風邪をひいた。熱がある {のだ/*からだ}。

<判断> <根拠>

<原因> <結果>

(6) a : 急いでくれ。時間がない {んだ/*からだ}。

<命令> <理由>

<結果> <原因>

しかし、(6 a)と(6 b)の先行文に対して設定される「課題」は異なる性質のものであるはずである。

(6 a)に対して設定される課題：「話し手はなぜこの発話内行為をしたのか」

(6 b)に対して設定される課題：「話し手はなぜ急いでいるのか」

この二つの「課題」における「話し手」の性質は異なっている。つまりaの場合の「話し手」は先行発話自体の行為主体であるのに対して、bの「話し手」は先行発話によって言明されている出来事の行為主体なのである。ここでは前者を「発話者としての私」、後者を「登場人物としての私」と呼ぶことにする。すると(1)のa bについてもこれと同じ区別が存在していることが分かる。

(1 a)に対して設定される課題：「話し手はなぜ熱があるのか」

(1 b)に対して設定される課題：「話し手はなぜこの判断をしたのか」

(1 a)の場合の「話し手」が「登場人物としての私」であることは明らかであろう。(1 b)の場合の「話し手」を「発話者としての私」と呼ぶことにはややためらいもあるが、いずれにせよこの場合の「話し手」が「登場人物としての私」でないことは明らかである⁷。

⁷もし聞き手への伝達による効果を無視した無標の発話内行為として「陳述」というものを考えるならば、「陳述」とは自らの思考や判断がそのまま発話されたものであることになり、従って、(1 b)の場合の「課題」における「判断」を「陳述」に変更することは不可能ではないと考えられる。なお、このこと背後には発話者は同時に自らの思考に対しては聞き手であるにも関わらず、通常はこの二人の「私」は同一化して「話し手」として扱われるという事情が関係している。

以上の議論を要約すると次のようになる。「のだ」文はある設定された「課題」に答えるものである。この「課題」において言及される「話し手」が「発話者としての私」である場合には「のだ」を「からだ」に変更することはできない。逆に、「のだ」を「からだ」に変更できるのは「課題」において言及されている「話し手」が先行発話において記述されている出来事自体の行為者である「登場人物としての私」である場合である。なお、「登場人物としての私」が第三者と同じ地位にあるものであることは次の例からも明らかであろう。

(6) b : 私は急いでいる。時間がない {のだ/からだ}。

→「課題」:「話し手はなぜ急いでいるのか」

c : 太郎は急いでいる。時間がない {のだ/からだ}。

→「課題」:「太郎はなぜ急いでいるのか」

次に、上述のPとQの関係のうちの最後の<関係4>（「QがPを言い換えたり、別の角度から述べたり、要約したりしている場合」）について考察してみよう。

4. 言い換えと判断の根拠

(7) a : 全員集まった。太郎と次郎が来たのだ。

b : 太郎と次郎が来た。これで全員集まったのだ⁸。

これらの例文における二文間の関係が出来事上の因果関係でないことは次のパラフレーズから明らかである。

(7) a' : *全員集まったのは、太郎と次郎が来たからだ。

b' : *太郎と次郎が来たのは、全員集まったからだ。

aは「PのはQだからだ」の形にパラフレーズすると、

a'' : 「全員集まった」と私が判断したのは、太郎と次郎が来たからだ。

⁸益岡(1991)の元の例文は「わけだ」を用いているが、この場合、「のだ」と「わけだ」は置換可能であると思われる。

となり、QがPという話し手の判断の根拠となっていることが分かる。しかし、bをパラフレーズした

b'' : ? 「太郎と次郎が来た」と私が言ったのは、全員集まったからだ。

は、何かおかしい気がする。より分かりやすくするためには、

b''' : 「太郎と次郎が来た」と私が言ったのは、「全員集まった」ことをあなたに知らせるためだ。

とでもする他ない。もちろんこれは「PのはQだからだ」という形式ではない。従って、(7)における二文の関係をこれまで考察してきたものと関連付けるためには「課題の設定」という観点が必要となる。

(7 b)の先行文によって設定される「課題」は「話し手は何のためにこのことを私に言ったのか」というものであろう。つまり、(7)における二文の間の関係は「PということはQということの意味する」すなわち「P=Q」という「言い換え」の関係 (<関係4>) であると考えられる。ここで重要なことは、この「課題」において言及されている「話し手」は「発話者としての私」であるということである。つまり、(7 b)の先行文が聞き手に対して引き起こす疑問はこの文によって言明されている出来事に対してのものではなく、発話に対してのものである。その意味では、ここでの「課題」は、「課題」が先行判断に対してのものである<関係2>の場合や先行発話内行為に対するものである<関係3>の場合と類似しているといえる。つまり、<関係2>~<関係4>の場合に設定されている「課題」はすべて先行する発話(あるいは判断)自体に対するものであるのに対して、<関係1>の場合の「課題」だけは言明されている出来事に対してのものであるという点で異質なのである。<関係1>の場合の「のだ」だけが「からだ」に変換可能であるのもこの点によると考えられる。

しかし、この考え方には問題点があるように見えるかもしれない。

(8) (遅刻して会議室に入ってきた人物が)

車が故障した {のです/*からです}。

ここでは「遅刻した」という出来事についての理由が述べられているにも関わらず「からだ」を用いることはできず「のだ」が用いられる。Pが明示されていない場合には「からだ」を用いることはできないのである。これは「からだ」の役割が合は因果関係自体の断定にあるということによるものである。つまり、因果関係における結果が文脈において聞き手と共有されていない場合には原因節のみを断定しても因果関係の断定にはならないということである。このことは、次のやり取りの例のように、先行する疑問文において結果説の内容が明示されている場合には「からだ」の使用が可能になるということによって確かめられる。

(8') A: なぜ遅刻したんだ?

B: 車が故障した (のです/からです)。

これに対して、「のだ」は、命題間の関係を表すものであるため、「Qのだ」のみを聞いた聞き手に対してこれと関連付けられている命題Pを推論させることが可能なのだと考えられる。

最後に、原因が直接観察不可能なものである場合の因果関係と<関係4>の場合のような「言い換え」関係の関係について考えてみよう。「言い換え」とはイコールの関係である。一方、すでに第1節で例文(1)に関して論じてあるように、原因を直接観察できない場合の因果関係は判断のレベルにおいて逆向きの因果関係を形成しやすい。つまり、「 $P \rightarrow Q$ 」という事実のレベルでの因果関係は判断のレベルにおいては「 $Q \rightarrow$ 『Pと判断できる』」という関係を習慣的に形成することになる。言い換えれば、「事実文」において言明される「結果」は話者にとっては直接知り得ない「原因」（「判断文」で表される）を推測するための観察可能な「指標記号」として機能するようになるということである。その結果、PとQの間にはあたかも「 $P \leftrightarrow Q$ 」のような二重の関係が形成されるのである。当然、この「 $P \leftrightarrow Q$ 」は「Pということは言い換えればQということだ」という形式の「言い換え」的なイコールの関係であると見なすことができるものである。他方、いわゆる「言い換え」的な関係においても、PとQが等価であるというのは、厳密に言えば、あくまで話し手および聞き手による判断を通じてでしかない。つまり、この場合の「等価関係」は判断を下す人物がいなければ成立しない主観的な関係である。「のだ」が表すのは話し手の思考においてPとQがこうした自然な推論によって結び付けられるということ

であるのだろう⁹

5. 「のだ」文使用の条件：

「課題」を察知するための文化的知識

「のだ」文の発話者の立場から見れば、「課題」の解決は自分に向けられたものである。しかし、自身の先行発話によって、あるいは先行文脈以外の会話の状況において、設定される「課題」の内容は様々であり、話し手にとってどのような内容の「課題」に解答しなければならないかは決して自明のことではない。これまで考察してきた例について、その「課題」の内容をまとめておこう。

<PとQの関係1>

(2) a : 風邪をひいた。雨に濡れたのだ。

「課題」：話し手はなぜ風邪を引いたのか？

<関係2>

(1) b : 風邪をひいた。熱があるのだ。

「課題」：話し手はなぜ「風邪をひいた」と判断したのか？

<関係3>

(6) a : 急いでくれ。時間がないんだ。

「課題」：話し手はなぜ「急いでくれ」と命令したのか？

<関係4>

(7) b : 太郎と次郎が来た。これで全員集まったのだ。

「課題」：話し手は何のために「太郎と次郎が来た」と私に言ったのか？

⁹ただしこうした主張は、PとQが共に「事実文」であり両者の間に出来事レベルでの因果関係のみが存在している(2a)のような例には当てはまらないが、この点については今後の課題となる。

すでに指摘してあるように、特に問題が明らかなのは(1 b)と(2 a)の場合である。これらの例では同一の先行文に対して異なる「のだ」文が続いている。つまり、話し手は同一の先行発話に対して異なる「課題」が設定されると察知したのである。この相違はこの発話が行われた会話状況の相違によるものであろう。あるいは、(7 b)の話者が「なぜ太郎と次郎は来たのか？」という「課題」には答える必要がないと考えたのはなぜなのだろうか。

話し手は「のだ」文の聞き手となる人物がどのような発話に対して、あるいはより一般的にどのような出来事に対して、どのような疑問を抱く可能性があるかを予測できるのではないかと考えられる。こうした予測は人々が潜在的に抱いている出来事や会話の進行についての「期待」や規範についての知識によるものであろう。こうした知識は「のか」のつく疑問文に答える際にも必要とされるものである¹⁰

(9) S : You didn't get an icecream sandwich

(アイスクリームサンドイッチは買ってこなかったの?)

C : I know, hh I decided that my body didn't need it

(ええ、私の体には必要ないって思ったのよ)

(Schegloff, 1988:128; transcription simplified)

CはSの質問に対して単に Yes や No で答えているわけではない。その代わりにCは、Sの質問を「非難」であると受け取り、「なぜアイスクリームサンドイッチを買ってこなかったのか」を説明している。確かにCの発話は直前のSの質問を受けてのものではあるが、Cが解答を示している「課題」はこの質問において明示されているわけではない。つまり、Cは明示されていない「課題」を察知してそれに対応しているのである。こうした予測が可能になるのは、おそらくSがCに対して抱いていたであろう「Cはアイスクリームサンドイッチを買ってくる」という「期待」をCが予測できたからであろう。このように、ある潜在的な「課題」に答えるには、聞き手となる人物が潜在的に抱いている「期待」についての知識が必要なのである。

¹⁰ 益岡 (1989) では疑問文において文末に「のか」が付く場合を「叙述様式判断型」、付かないものを「存在判断型」と区別して考察している。紙面の都合上、「のか」の付く疑問文全般についてここで論ずることはしないが、特に Yes/No 疑問文のうち「のか」の付くものには「非難」や「驚き」の含みが生ずることが多いことには注意して頂きたい。

逆に、現実の会話において使用された「のだ」文がどのような「課題」に答えるものであるのかを考察することによって、人々が出来事について潜在的に抱いている「期待」や規範的な知識の内容を明らかにすることも可能になるのではないかと考えられる¹¹。

[参考文献]

- Antaki, C. 1994. *Explanation Slots*.
 (in Antaki, C. *Explaining and Arguing: The Social Organization of Accounts*. Sage)
- 安達太郎 1989. 「日本語の問い返し疑問について」
 (『日本語学』 8 - 8、明治書院)
- Austin, J.L. 1962. *How to do things with words*. (Harvard University Press)
 (坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、1978)
- 蓮沼昭子 1991. 「対話における『だから』の機能」
 (『姫路獨協大学外国語学部紀要』第4号)
- 久野暉 1983. 「否定辞と疑問助詞のスコープ」(『新日本文法研究』大修館書店)
- 久野暉 1973. 「ノデス」(『日本文法研究』大修館書店)
- 益岡隆志 1991. 「説明の構造」(『モダリティの文法』くろしお出版)
- 益岡隆志 1989. 「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」
 (仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』くろしお出版)
- 松岡弘 1987. 「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」
 (『言語文化』第24号、一橋大学語学研究室)
- メイナード, 泉子・K. 1993. 「会話表現の対照—接続の表現をめぐって—」
 (『会話分析』くろしお出版、第10章)
- 三上章 1953. 「ノデアル」(『現代語法序説』1972年復刊、くろしお出版)
- 佐治圭三 1991. 「『こと』『の』『のだ』」

¹¹ 日常会話における「説明」を人々の抱いている潜在的な「期待」という観点から会話分析や社会心理学の知見を用いて考察するという方法は、著者の修士論文「日常生活場面における『説明』の発生状況と影響の分析」において試みられたものである。

- (『日本語の文法の研究』ひつじ書房、第3部)
- Schegloff, E.A. 1988. *Goffman and the Analysis of Conversation*.
(in Drew, P. & Wootton, A. (eds.) *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*. Polity Press)
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. (Cambridge University Press)
- 田中望 1979. 「日常言語における“説明”について」
(『日本語と日本語教育』第8号、慶応義塾大学国際センター)
- 田野村忠温 1990. 『現代日本語の文法—「のだ」の意味と用法—』和泉書院
- 田野村忠温 1986. 「命題指定の『のだ』の用法と機能—諸説の検討—」
(『言語学研究』第5号、京都大学言語学研究会)
- 寺村秀夫 1984. 「説明のムード」(『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版)
- 山口佳也 1975. 「『のだ』の文について」
(『国語学研究』第56集、早稲田大学国文学会)
- 山森良枝 1990. 「接続詞の二類型と談話の情報構造—『つまり』と『だから』を手がかりに—」(『日本語学』9-5、明治書院)

Summary

On Japanese NODAs: Their Expression of Relations Between Propositions and Setting Up Problems

Katsuya TAKANASHI

In this article Japanese sentence final expressions, “NODA”s, are discussed. Viewing NODAs as expressing the relations between propositions including NODA (proposition Q) and those which precede (or sometimes follow) them (proposition P), these relations are classified into four major types, and interrelations between these four types are considered. It will become clear that it is useful to suppose some *problems* (or themes) from the hearer’s point of view which are brought about from the preceding proposition Ps. These problems are divided into either those about the causes or reasons of events described in proposition Ps or those about something concerning the illocutionary acts that utterance Ps are performing. The issue is that without any contextual or cultural knowledge it is impossible for speakers of Ps to determine what problems the (potential) hearers might set up about Ps.